

進行頭頸部癌に対する超選択的動注療法における合併症としての肺炎のリスクおよびその予防

小島雅貴 横山純吉 松本文彦 大峽慎一
藤巻充寿 吉井良太 池田勝久
順天堂大学

【背景】頭頸部癌の中でも特に上気道を原発巣とする、口腔、中・下咽頭、喉頭癌治療において構音・嚥下機能の温存は患者のQOLの向上に直結すると思われるが、常に肺炎などの気道感染症のリスクと隣合せとなり得る。近年、放射線化学療法は多施設で精力的に行われているが、放射線治療による粘膜炎の合併は不可避であり、悪化の予防、症状緩和が重要である。当科では進行頭頸部癌に対し、動注化学放射線治療により機能温存を図っている。治療前より歯科との密な連携により、患者の口腔ケアを徹底し、また粘膜炎に対しては、オピオイドを用いた除痛および複数の含漱薬を併用により症状緩和を図り、喀痰の自己排泄を促すことで気道感染症の予防に努めてきた。

【対象と方法】2009年1月から2012年5月までに当院で超選択的動注療法を施行した進行頭頸部癌患者の内、口腔癌15例、中咽頭癌6例、下咽頭癌20例、喉頭癌10例に対して、後ろ向き検討を行い、治療合併症としての気道感染症の有無、治療完遂率、気管切開・輪状甲状間切開の使用頻度を検討した。

結果:舌癌の手術拒否1例を除き、全例StageⅢ以上の進行癌で新鮮例45例、再発例6例であった。男性44人、女性7人であり、年齢の中央値は63.5歳(30~87歳)であった。治療前の口腔内環境は清掃不良および歯周炎が28例(55%)と半数を占めた。全51例中、治療中に肺炎を合併したのは3例(5.9%)であり、重症歯周炎1例、中等度歯周炎2例であった。喀痰のコントロールのために気管切開を行った症例は1例(1.9%)であった。全例が治療を完遂した。

【まとめ】動注化学放射線治療を行った進行頭頸部癌患者に対し口腔ケアの徹底、粘膜炎の症状緩和に努めることで、QOLを低下させることなく感染症の合併を予防できた。